

非認知スキル

松 島 暢 志

近年、幼児教育分野でも大きく取り上げられるようになった用語に「非認知スキル」というものがあります。これまで長い間、学力や知能指数（IQ）といった認知スキルが高い方が、将来の成功を予測すると考えられていました。しかし、必ずしもそれだけではないことが、いろいろな研究から明らかになってきました。もちろん学力やIQは重要なものの一つではありますが、例えば「東大に入った人」は全員その後の社会生活で成功しているわけではありません。IQが同じくらい高く、東大を卒業した人でも、同僚や上司と上手に付き合いながら、粘り強く仕事を続けられる人と、そうではない人では、職業人としての評価に差がつくだろうということは想像できるでしょう。非認知スキルとは、このような「他人や自分と上手に付き合い合っていく能力」と言い換えることもできます。経済協力開発機構（OECD）が2015年に出した報告書の中では、今後教育で育むべき能力は、この非認知スキルだと強調されています。

非認知スキルは、①他者と上手に付き合い合う力、②感情を管理する力、③目標を達成する力の3つに分けられます。他者と上手に付き合い合う能力とは、思いやりや社交的なスキルをもつことです。自分の感情を管理する力とは、自尊心を持つことや失敗から学んで立ち上がることです。目標を達成する力とは、粘り強く取り組んだり、自分を励ましてやり抜くことです。どれも学校や職場で重要だということは、容易に想像できると思います。

この非認知スキルという言葉は、1960年代にペリー就学前計画という介入研究を開始した、経済学者のヘックマン（Heckman, J.）が使い

始めました。彼は、通常であれば幼稚園に行けないようなアフリカ系米国人の貧困層の子どもを3歳から2年間幼稚園に通わせるという介入を行い、その効果がどれくらいあるのかということ、幼稚園に通わなかった貧困層の子どもと比較することで明らかにしようとしていました。研究は今も進行中で、現在、40歳までの研究結果が公にされていますが、収入、持ち家率、犯罪率、生活への満足感などで、幼稚園に通わせてもらったグループの方が、そうでなかったグループよりも明らかに好ましい結果が認められています。IQ（認知スキル）は、幼稚園に通っている間は2つのグループで確かに差がありましたが、その差は就学後しばらくするとほとんどなくなりました。2年間の幼稚園教育では、一時的にしかIQを高められなかったということです。しかし、2つのグループでその後の生活に差があったということで、ヘックマンは、IQ以外の能力、つまり非認知スキルが幼稚園で培われ、それが長期的に効果をもたらし続けているのだらうと主張しています。

非認知スキルを伸ばすためには、早期教育のような特別な働きかけをたくさん受けるということは必ずしも有効ではありません。むしろ、家庭や保育において、信頼できる大人と子どもの自然な関係性（アタッチメント）の中で育つことが、まず重要だと言われています。

〈参考文献〉

国立教育政策研究所「非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書」、2017年。